

今月の 我がマチの 一番星☆



戦争の悲惨さと平和の大切さを語る
氏家さん(写真左端)



氏家 隆さん

戦争の語り部として

追分で生まれ育ち国鉄(現JR)に就職。今日まで87年間過ごしてきた氏家隆さん(追分青葉在住)が取り出したのは小学生が書いた感想文です。「これが私の宝ですよ」と笑顔でページを開きます。学校から頼まれて追分小学校で毎年戦争について話をしてきました。

最初依頼を受けた時は断つたのですが、「戦争の恐ろしさを話せる方が少なくなつた現在では氏家さんが適任」と説得され引き受けました。「平和な時代に育つた子供たちは私の話を真剣に聞いてくれます」と感激。学校で椅子を用意してくれますが、できるだけ立って話しをしているとのこと。児童一人ひとりの目を見て自分が難しいことを言っていないか反応を確かめながらことばを選んでい

ます。

追分機関区が空襲を受けたとき、SLの動輪をつなぐ車軸が機関銃の攻撃を受け穴が空いたようすなど現場にいた者しか分からない出来事を子供たちに語ってきました。

「いま小学生の祖父母の中には戦後生まれの方もいると思

います。戦争の悲惨さを肌で感じた年代の人が減り、平和の大切さを改めて伝えなければなりません」。

同じ時代を生きてきた仲間が亡くなったり、認知症で介護が必要な方も増えていきます。日ごろから頭を使うように心がけている氏家さんは、記

憶力も鮮明で声もはっきりしているうちは自分が体験してきたことや感じたことを後世に伝えていきたいと最近強く感じるようになったそうです。自分が必要とされているうちは、過去の戦争を話す語り部として社会に貢献していきたいと力強く話していました。

農業被害対策と野生の生態系のために



土田 和衛さん

「シカによる食害を受けた農家の人の気持ちはよく分かります」と話す土田和衛さん(早来源武)の職業は農業。昭和36年に狩猟の免許を取得し、現在安平町有害鳥獣対策協議会の会長をしています。また鳥獣保護員として野生動物にも精通し、「有害鳥獣を捕獲するには日ごろからその生態を観

察することが大切」と土田さんは強調し、足跡を見てどんな動物がどのような行動をしているか判断する勘を常に養っています。「住民からクマを見たと通報があった」と駐在所から連絡を受けたとき、指摘された場所は何度も見ておりクマの出没の痕跡はないことと数日前に黒い大型犬が徘徊している姿を見ていたので誤報だと自信を持って現場に向かうとクマが歩いた跡がなく犬であることが判明。人は思い込むと黒く動くものを見ただけでクマと錯覚しがちですが、人命第一なので、まず現地には行くようにしています。銃器の規制が強化され、狩猟免許を更新しない人が増えていることを危惧する土田さんは若いハンターの育成の必要性を訴えます。有害鳥獣対策には農家の人との理解と協力が重要。地形を熟知するため、一人前になるには時間がかかるということです。

シカやクマのほか、日本には生息していなかったアライグマの被害も急増し懸念されています。今後は、農業被害対策に限らず、北海道の動植物の生態系への影響も考慮しなければならないと話していました。



有害鳥獣対策協議会であいさつする
土田さん(右端)―平成21年4月撮影―